

蜀山人大田南畝書簡 続

著者名(日)	濱田 義一郎
雑誌名	大妻女子大学文学部紀要
巻	13
ページ	25-32
発行年	1981-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00003549/



蜀山人大田南畝書簡 続

濱田義一郎

本学紀要六・七・十一号の同名拙稿上中下の後に見ることを得た十
五通を収める。例に依て野間光辰教授の御支援を得たほか、波多野幸
彦氏からも御示教をいただいた。あつく感謝の意を表するとともに、
所蔵者の皆様にも謹んでお礼を申上げる。なおC46―52は明治三十八
年の『好古類纂』に掲載されたもので、表記や用字に疑問があるが致
し方がない。

C 39	横田（如圭） （C 32横田宛に続く。酒を貰った礼）	文政五年四月（推定）	山添天香堂	C 49	青山堂 （青山堂の古書二十四冊を見、表題や識語を書いてやる、双六を依頼）	四月八日 文化八年か	
C 40	吉田篁墩 （出版につき高屋重三郎と面談の報告）	寛政九年四月十六日	手紙雑誌	C 50	平々山人 （雲茶会と古書五冊の題序考）	文化八年五月二日	
C 41	鈴木白藤 （漂着船文書の和解について）	文化十三年九月十六日	今泉隆平氏	C 51	平々山人 （双六の礼、魯西亜都城図）	即事 文化八年か	
C 42	友野霞舟 （孫二人の師への懇願）	文政四年一月十一日	国会図書館	C 52	青山堂 （蔵書三巻に丹表紙つけてくれた礼）	六月廿一日	
C 43	篠崎小竹 （白紙立葉に揮毫して届ける）	三月廿三日	大阪中之島図書館	C 53	桃李園	十二月朔日	藤井経勝氏
C 44	甘左衛門 （鳥文斎栄之巻物の事）	乃刻	増市東陽氏				

C 39 文政五年

山添天香堂藏

二白

*1 瀧水一壺御投惠難有候 病中少しツ、日々相用可申候 打撲ニ□□く
申候間手前勝手ニ用申候 御一笑可被下候

*2 横田 兄

杏花園

*1 瀧水たきみは日本橋新和泉町四方酒店の銘酒。

*2 横田汝圭は画師、『江戸方角分』には、号復庵、字大復、浜町住。

C 40

「手紙雑誌」第一号

簗墩先生几下

大田 覃 拜復

朵雲飛来拜見仕候 緑陰之候弥御万福被成御座奉欣喜候 然者御はなし申上候清朝興創事略御原稿本出来候分態々御もたせ被下辱刮目拝見可仕候 明日耕書堂へ参り候而面談之上早速上候様ニ可仕候 御蔭にて吾党之もの清朝創業之国事喙三尺を長し可申候 満洲諸地図も入候て猶又よろしく可有御坐候 いづれ早々承合書肆参上いたし候様ニ可仕候 勿々不一

四月既望

尚々先日*4も耕書堂へ話候処長キ方はいかほどにてもよろしく候よし申候 三卷にても五巻にも相成候はゞ猶々よろしき様申候 以上

*1 吉田氏、称坦藏。儒者。寛政十年歿。六十八歳。南畝は寛政六、八年に算墩の随筆『近聞寓筆』を借抄している。

*2 旧安田文庫に蔵したという。

*3 葛屋重三郎。店は日本橋通油町。

*4 寛政九年三月廿七日に久世丹後守の病氣見舞の帰りに葛屋へ寄り、重三郎の「病氣未ダ全快セズ」と『会計私記』に記している。「先日」とはこの時をさすのだろう。しかし葛屋の病氣は恢復せず、五月六日に四

十八歳で歿した。

C 41 文化十三年

今泉隆平氏藏

尚々書名書付二通上申候 何とそ半帯ニ御写し可被下候
連日晴色御同慶仕候 此間へ御細書拝見 朝川筆記并沿海遺聞*2とも神速ニ御写し御返し被下慥収領仕候 即朝川次巻又々上申候 如仰此節短日一向無寸暇よし先々外府ニ御写し置可被下候 拙書和解之文も此内へ大方籠り居候 和解中之自賛ハ

蘿卜 を大根と訳申候 トハ葡ノ音ヲカリ候ト存候

蕃茹 を琉球芋といたし候 茹薯同音歟

活鳩 を鶏と訳申候 宛字歟

右ハ朝川ニ直ニ承候間安心いたし候 右之通相違無之感心いたし候由是ハ崎陽にて唐人共館内之除店帳ニ豆腐を付と書 糕を羔と書なと類を寛居候間推量にて書上候処まくれあたりニあたり候而絶倒いたし候和解も一兩日中少々書足し候而可入御覧候 其外楨棋あし飯愿等ハ此方ニてもしれかね朝川もしれかね唐人ニ承候而漸分り候由 絶倒いたし候

一朝顔通 二本 収領いたし候

一勸進能儀晴天に候へは十八日初日之よし御坐候 色々文書共取あつ

め申候追而可入御覧候已上

九月十六日

二白此間被仰出候百寮訓要何分奉頼候以上

白藤大兄

蜀山人

*1 朝川善庵（一七八一—一八四九）。

*2 南畝が書留めた『沿海異聞』の誤記か。

*3 掛買帳。

*4 『花壇朝顔通』の略。文化十二年刊。

*5 文化十三年九月幸橋御門外で観世太夫の勧進能が催された（『武江年表』）。

*6 『百寮訓要』は二条良基の著。

*7 鈴木白藤（一七六七—一八五一）名恭字敬、通称岩次郎、幕臣。牛込山伏町住。なお牛込袋町の光照寺にあった白藤・桃野父子の墓は取払われて現存しない。

C 42 文政四年 国会図書館「先哲書簡」^{*1}

新禧之賀申納候益々御万福御重歳奉恭喜候 老病存之外当年快元日御礼四奉行廻勤仕候 腹部も和キ休業仕候 此分にて当春は花も見られ可申と大悦仕候 扱て今日御発会嚙御取込と存候 第二孫鉄二郎義段々御世話被下難有存候 御稽古遠方故何とも自由なから近所昌平学問所へ素読御願申上度存候 何分よろしく御差図可被下候 たしか十五日之様及承申候 何時比々罷出候事ニ候哉 是等之義御指揮奉希上候 扇子等をも持参仕候事ニ候哉承度奉存候

扱て長孫鎌太郎事も近來游惰にて読書もはか／＼しくいたし不申様子にて困り入候 私とやかく申候而ハ老父之小言ニ成候而あしく存候間何とそよろしく御世話ながら御努力可被下候 少年不努力如老父罷成嗜臍不及奉存候 何分御憐察可被下候 早々己上

初春十一日

二白 石川君詩拝し置候 何方へ遣し候ハ相届可申候哉何分宜奉願

上候 入銀等之義も何分御願申上候 何程にて可宜候哉

此古瓦硯唐之骨董舖之偽物にて可有之候御慰ニ供几下候 御笑留被下

候ハ可為本懐候 勿々不乙

友野兄^{*6} 不及貴答

覃 拝

*1 文政四年正月元日は駕籠で年礼に廻り「城南城北年初ヲ拝ス」と賦している。

*2 此年の勘定奉行は、村垣淡路守、石川左近将監、遠山左衛門（景普）、

松浦伊勢守の四人である。

*3 鉄次郎は南畝の「弄孫詩」によると十五歳またはそれ以下。

*4 駿河台の南畝の家台からは牛込北御徒町の友野宅は遠く、昌平学問所の方がずっと近い。

*5 鎌太郎二十一歳、すでに二歳の子がある。

*6 友野霞舟、称雄助（一七九一—一八四九）、この年三十一歳。霞舟が十八歳の時に、十二歳の川路聖謨少年が入門した（『森鉄三著作集』）というから、塾を開いて既に十年以上の経験がある。

C 43 篠崎家「諸名家書簡」

篠崎長左衛門様 大田直二郎

昨夜より之狂風弥御清雅被成御坐奉欣慰候 然者先日御草稿御淨写被下口戴不浅珍藏可仕候 御旅中御掛念殊浪花筆五枝御投恵被下辱拜受いたし候 白帟五葉被遣則認呈上いたし候草筆に候へとも御帰途前迫候事故如此ニ候 廿七八夕方ハ在宿いたし候 勿々不乙

弥生念三

二白只今帰宅早々申上候

* 篠崎小竹（一七七—一八五〇）とは浪花出役中の享和二年正月以来の旧知。江戸へ来た時に南畝を訪れたのであろうが、年次は未考。

C 44 八尾市 増市東陽氏藏

拝見仕候秋涼益御万福奉恭喜候 栄之巻物よろしく出来候由大慶仕候京城四時榮ハ栄之へ遣候節取出し例の地獄箱へ入置候間早々見出し上可申候 何々之嘉肴被下難有 幸客来早速用立申候 御厚志不浅奉存候 大取込早々

乃刻

蜀山人

甘左衛門様 貴報

* 鳥文斎細田榮之は旗本の浮世絵師、南畝より六歳若い。

C 45

岸本勝次氏藏

尊書奉拜見候 如仰春雨柔風益御機嫌にて御□濟奉恐悦候 昨日者始
而罷出御馳走被仰付難有奉存候 然者御事多御中見事成一籠被下置難
有拜受仕候 今日客来早速一同拜味難有奉存候 昨日者此節之非常之
義にて町々敵重故失礼ニ帰宅仕甚奉恐入候 何分老耄御有恕奉願申候
二月十九日 大田直二郎
片桐儀平様 貴報

C 46

青山清吉出品 好古類纂二ノ九

奇物に御座候長く珍藏可仕候折本落手明日は出勤夫より帰宅 外へ道
より無之候まゝ夕方認メ上可申候 角画之事は三十年來諸侯之求にも
書不申候まゝ天明の年号にいたし上可申候 外より承候ハ、先年より
所持のつもりに可被成候 可相成は少々煤を御引可被成候 あまり紙
あたらしくては又々外にやかましく候

寸錦雜綴

右返上いたし候 昨日は早速二本之表紙御付忝候 昨日ト養之伝入手
申候所此間上候延宝七年三月は誠に古写本にてト養歿候は同六年十二
月之事故歿後三四ヶ月めに写候本と相見え申候 板本と相違御座候
板本出候ハゞ序に右家譜を題し可申候 出がけ早々以上
即刻

青山堂主人

蜀山

* 小さい長方形を重ねたような粗画。

C 47 口上

好古類纂二ノ九

雨中如何 今朝被仰下候平々伝并角画唯今認候間上申候 別而二十年
来角画はいつ方へも認不申候へとも千卷文庫之什物と存候て年号旧名

書風も天明にかへて認め上申候間古より御所持之つもりに被成可被下
候 煤斗引候ても可宜候

一 此折本へすり物はり置候 何とも申兼候へとも両方へ表紙御付可
被下候乍序願上申候 素人之ふさいくに候 もしよく折め付候ハゞ御
付可被下候

一 千卷文庫は追て漢文にて認め上可申候早々以上
即刻

青山堂主人

蜀山

* 平々山人は青山堂の別号。「平々山人伝」は南畝の『放歌集』に入る。

C 48

好古類纂二ノ九

平々山人

蜀山人

拝見いたし候 雨故涼冷弥御平安珍重之至候 十二月詩歌一兩日中上
可申候 取込早々以上
即刻

尚々新詠二首上申候

終南進士精忠思報手執一劔以驅虛耗

ふんとしの虎の皮むく爪ならて鬼をしてやる鍾馗大臣

蜀山人

千日の注連はひと共小男鹿のつめたちたる家にいたらし

蜀山人

C 49

好古類纂二ノ九

青山堂主人

蜀山

雨中如何 参居候丹表紙之中点検いたし表題或は序書候分

きのふはけふの物語 西川百人女郎 姿絵百人一首 和国名所鑑

日本名女咄 軽口咄 置土産 身のかゝみ 黄素妙論 金玉花月集

世上ちゑ袋 かるかや同心二本 一心二河白道 けいせい山椒太夫

忠臣身替公平 大しよくわん いせ物かたり かる口紅葉傘 若草
ものがたり 恋の文つくし 艶俗衣服東都染 江戸雀 ふくさづけ

右二十四冊

右返上いたし此方帳面けし候間そのかた帳面御けし被下度候 又々新
本可被遣候 残り候は一所にあげ可申候以上

四月八日

尚々双六御すり可被下候 青山文庫額之字は引受いたし可申候以上

C 50 文化八年

好古類纂二ノ九

平々山人 几下

蜀山

拝見いたし候梅天濛々弥御平々珍重御事候 表紙御付被下忝存候 明
日雲茶会^{*1}承知いたし候 いづれ役所へ一寸出勤いたし早引にいたし直
に明神前へ参り可申候

棠大門 男色ひよく 犬張子 新おとぎ 葉なし草 五冊

右題序考出来上申候 帳面御けし可被下候 押付出かけ一寸参り候て
明日之会席へ持参物御頼可申候早々以上

さつき二日

二白俸方へ御伝言之処一兩日流行之風邪にて取卧罷在候間乍残念参上
仕まじく候万々貴面可申上候以上

*1 雲茶会は古書画器玩を持寄る会で文化八年四月二日に青山堂が主催し
た。これは第二会。

*2 古書に題簽や識語を書いてやる。

C 51

好古類纂二ノ九

平々山人 几下

蜀山人

先刻は双六神速に被遣忝候 早速被具可申付候

青山文庫額 聯

急ぎしたゝめ上申候残りは跡より可上候又々出かゝり候間早々以上

即時

魯西亜都図外へ帰候まゝ御慰ニ御目にかけ候 川中に有之也 □ハ都
城之由ニ御坐候 御写し被成候とも御勝手次第

C 52

好古類纂二ノ九

青山堂主人几下

蜀山

冷暖不定却而増蒸暑候 弥御平安珍重之至に御座候 さては上置候藏
書三巻早速丹表紙御附被下御蔭珍藏いたし候光輝を生し申候

一手鑑一帖めつらしく一覽可仕候 尤胤之次小伝書入可申候 追々
出来候事と相乗申候 此節虫干にて段々古書とも取出し目録付改可申
と存候 只々多事にて無寸暇嘆息いたし候

一 留め置候書巻とも段々涉胤奇事古色驚目申候 世上真に好奇の人
無之多くは人ぞやめき候やらんにてかゝる奇物あることをしらず

一 龍馬の額之事是又承知いたし候日々出入とも俗客入来妨用事申候
此節暑故屋敷方等は一向断 引より閉居読書可致と存候へとも却て紛
冗嘆息いたし候早々以上

六月廿一日

C 53

横浜市 藤井経勝氏藏

桃李園主人

杏園

口上

近年之大雪如何見たまふや 然者来三日早雲会之事三日四日共無抛且
亦此度ハ井筒のほとりニ茶碗酒之御趣向今少し□□いたし度 年忘れ
と可仕哉 いづれ今日ハ七日迄はむつかしく候 万々拝顔可申上候

□□□□是も中旬よろしく候 万々申上候 以上

十二月朔日

二白市川をたゝへる詞御覽ニ入申候

掲載の書簡について、また宛先人物と南畝との交遊について若干の補足を加えることとしたい。

C 39 横田宛は紀要第11号に掲載したC 32文政五年(推定)四月十一日付の横田如圭宛に続く書簡と思われる。すなわち七十四歳の南畝が三月三日の誕生日に階下に落ちて打撲したことを報じたのに対し、横田が見舞として清酒を贈ったへの礼状である。

C 40 考証学者の吉田篁墩は清朝成立についての考証を出版しようとして、かねて南畝に幹旋を乞うたものらしい。南畝は文筆を捨てて既に十年を経、幕府の勘定所の役人になっているが、この寛政九年(時に南畝四十九歳)正月にも薦屋重三郎の店に年賀に立寄るような間柄なので、三月に訪れて病中の薦屋に篁墩の希望を伝え、四月十七日には「原稿本」を見せて面談することになったのである。しかし重三郎は翌五月の六日に歿し、南畝は勤務の帰りに谷中正法寺での葬儀に会葬した。したがって出版は実現しなかったが、南畝と薦屋の親しさが知られるのである。そして文政四年に「十三夜耕書堂看月」の詩があるのを見ると、重三郎の死後にも及んだらしい。

C 41 鈴木白藤と南畝との詩文の交りは享和二年、白藤三十六歳のころに始まっている。そして文化九年に書物奉行に就任した時も、文政五年に罷免された時も南畝は詩を贈り、また『あやめ草』には「白藤子よみて贈る」として「いかほどの波の濡衣きするとももとよりかたき岩次郎どの」の狂歌をよんでいる。この書簡は文化十三年だから、書物奉行在任中で、漂流船に関する文書の翻訳などもその職務だったことが知られる。なお白藤宛はC 10・11に既出。

C 42 友野霞舟は南畝より四十二歳下なので、晩年の知人だが、若くして学問人格が優れているのを知って孫を入門させたのだろう。そ

して子の定吉が病廃したので孫に期待をかけたのだ。鎌太郎は十三歳の時に童子科の賞を得て、白金三錠を賜わり、南畝は漢詩を教えてしきりに聯句などをしている。それで一層の指導を乞うて霞舟に古瓦硯を贈り、この書簡で「貴客ニ及バズ」と書いているが、五月ころ霞舟から詩を寄せて謝意を表して来、それに対して「和友野霞舟見寄」の詩賦をしている。その中に「君ノ如キハ吏ニ非ズ還タ隠ニ非ズ、出処行蔵亦両全」と賞讃する一節があつて信頼感を窺わせる。

霞舟は南畝門下の椿軒鈴木文や碧海井上玖とも親しく、南畝の死後には鎌太郎に請われて南畝翁行略を撰している。

C 43 篠崎三島・小竹父子が南畝詩にあらわれる最初は大坂銅座在役中の享和二年正月で、大坂での詩友馬田国瑞・常元寺らとともに会ったのである。「席上和篠崎弼承弼」の詩を作ったのだが、題がわかるだけで作は伝わらない。

C 44 宛先の甘左衛門は不詳。鳥文斎栄之への染筆依頼に幹旋の労を執ったのであろうか。栄之との交渉は文化十年三月に隅田川で妓をのせて舟遊を共にしたと『一話一言』巻三十六に見えるが、たぶんもっと前から相知で、栄之は南畝の像をいくつも描いている。

C 45 宛先片岡儀平は不明。時期は「此節之非常之義」と「老耄」とから文政四年の「二月中旬より風邪流行。賤民へ御救米銭を賜はる」(『武江年表』)とある時分のことと推定される。

C 46 52までは青山堂(雁金屋清吉)平々山人の子孫の出品である。雁金屋書店がト養狂歌集の版本を入手したので、ト養家譜を題詞として書いてやろうというのである。それにより売値があがり、青山堂は儲けが多くなるわけで、その代り改裝や綴直しは青山堂にたのむ(C 47)のである。

C 49 青山堂の在庫二十四冊に表題や序を書いてやる。もちろん青山堂は何かの形で酬いたのであろう。『南畝集』には文政五年（七十歳）に「過書肆青山堂飲酒」の詩などある。

C 50 雲茶会の記事があるので文化八年の書簡と知られる。神田明神前の雲茶店を会場として古書や奇玩を持寄る催しで、青山堂が世話役となって四月二日に初会を開いた。参加者は佐々木花禅、山東京伝、立川馬馬、南畝その他であった。『一話一言』や『式亭雜記』にも記載がある。

C 51 魯西亜都図についての文章は今は大東急記念文庫の所蔵となっている（善本叢刊9に入る）。

C 53 桃李園は狂名紀輕人、通称甚兵衛。本町四丁目の呉服屋伊豆蔵の支配人で、享和三年の南畝の日記に再三あらわれるし、「桃李園記」を書き与えてもいる。桃李園はその翌年ころに小田原に移り住んだので、南畝が文化二年十一月に長崎奉行所での任を了えての帰途、小田原に泊った時は旅宿へ訪ねて来た。そして文化五年には芦の湯の松阪屋などの旅館から頼まれて狂歌の揮毫を乞い、同六年に四方山人の狂歌碑が建てられた（現存）。なお書簡の所蔵者藤井氏は桃李園の後裔である。（桃李園については「伝記」昭17・5拙稿「南畝判取帳」第四参看）

なおこの機会を利用して、紀要六号七号の上・中の書簡について少しく補足・訂正をほどこすことにする。

上。B 6 文化四年の長崎中村李園宛書簡に「去年御医者井沢自安老

へ託し上条源二郎へむけ出し候書状」云々とある井沢は南畝の誤記であって、たゞしくは伊沢・安すなわち蘭軒である。

蘭軒によれば伊沢蘭軒は文化三年五月十九日に江戸を發し、七月六日に長崎に着いた。その出發前に蘭軒は、一年前に長崎出役を了えて帰った南畝から予備知識を得んがために面会したのだろう。当時長崎には名医の胡兆新（号星池）のほか張秋琴、江泰交、錢位吉、江稼甫など文事を好む清人が多かったし、唐通事や町役人にも知人が多いから、蘭軒の文を借りれば「定めて前年の所見を説いて、少い友人のために便宜を謀つたことであらう」、時に南畝五十八歳、蘭軒は三十歳であった。（三十歳の人を「老」とするのは異様だが、剃髪しているからであらうか）。

その年の八月、南畝は月を見て詩を作って蘭軒に寄せ示し、蘭軒は長崎でこれに和して「風露清涼秋半天」云々の七律を作ったとあるが、原詩は建部氏朝白園十三夜詩会での作で「尋常苦雨喜晴天」にはじまる。なおこの詩会については、B 25如登子宛九月七日書簡の中で言及している。

蘭軒はB 18の中村李園宛にもあらわれる。文化十年に唐通事彭城仁左衛門（劉君美、号夢沢）が江戸へ来たのを迎えて七月、「隅田川舟行、堤の上之酒宴」をして、井沢氏が持ち前の大声を發したことを報じているし、また『南畝集』には伊沢蘭軒・劉夢沢と季夏に墨水に舟を泛べた七絶を収めている。

B 7 長崎の中村李園宛（文化四年）に「何やら蠟を以て固め候藥物、定て奇薬と存候へとも、甚不案内に御ざ候」とあるのを、南畝がカラスミを知らなかったと解して注を施したが、やはり文字通り何かの薬と見るべきだろう。というのは、二年前の『蜀山余録』に長崎野母の鱺子は鱺の子で美味だと書いているし、この年の詩に「崎陽村上如登寄野母浦魚胞」とあるのもカラスミと思われるからである。この後は鱺子を長崎の知人から貰ったりわざわざ取寄せたりして愛用し、

また竹垣柳塘に分譲したことも知られる。

B 25 長崎村上如登宛に文化三年八月十三夜から十八夜までの観月宴を報じている、その時の詩は『南畝集』にあつて、泰平恢復の江戸を偲ばせる。なお宛名「如登子」の肩の処に*12とあるのは誤りなので、削除を願いたい。

中。C 5—8 山内尚助号穆亭は『東京掃苔録』によれば大信寺墓地に墓があつて、享和二年九月十三日歿、山内院殿盛学岐道穆亭居士。したがってC 9の文政四年の山内尚介宛は別人、すなわち子息である。森銑三氏の著作集によると、父尚助は御先手与力で、南畝と同じく松崎観海の門人、鈴木白藤の句読の師だという。子の尚介は名正誼、字は士直、松門と号した。詩文を好んで鈴木白藤・友野霞舟・植木玉厓・池田蕉園・鈴木幽谷らと交遊があつたという。つまりC 9書簡は学友の子息に、自分の詩集のことを報じているわけである。

K 1 亀屋久右衛門（文宝）の店は『七十五日』に出ている。

元飯田町坂上、亀屋久右衛門、万御茶品々。

K 22 文化八年十一月七日に深川の羅漢寺で普茶料理を一脚四人詰で食べたが、これは「羅漢寺先住持玄之禪師百日忌」の設齋筵を言い立てにした好事の催しであつたらしい。C 26に「精進料理に候へどもおかしきものに候」と言い、「貧生貪口流涎」と賦している。小名木川をさかのぼって普茶会に出席するというのは、なかなかの風流であつたらしい。

T 21 文化九年八月の竹垣柳塘宛に「先之升屋お市」に逢い、一段美しくなつたと知らせている女は、天明年中の高級料亭升屋、一名望汰瀾の娘で京伝の『古契三娼』にはあつ、という名になっていると註し

たのは誤りである。文化四年ころの狂歌に（『をみなへし』）

春の雪ふるあした、すみだ川のほとりにすめる亀屋菊屋の何某
と吹屋町升楼にてよめる

世の中の人には雪とすみだ川春風寒く吹屋町がし

升楼のいらつめ市といふが乞ふにまかせてその壁にかく

むかし人はかくいちはやきみやびをなんしけると書きし伊勢物語

T 22の柳塘宛ではそれを想い起して「昔遊雪夜之事など物語いたし候」とか、美しさに「あまりに感心、うたも出来不申、むかし升屋の壁へ書しうた書遣候」としている。すなわちこの吹屋町の升屋の娘お市だったのである。